

「宝塚大学 東京メディア・コンテンツ学部」の“今”を伝えます

報道関係各位

2012年3月



作：マンガコース4年 清水 詩帆さん

3月1日に宝塚大学のホームページをリニューアルしました

＜宝塚大学 東京メディア・コンテンツ学部に関する情報のお問合せ＞

宝塚大学 東京 新宿キャンパス 広報室

担当：金澤、山本 TEL:03-3367-3411

＜ご掲載・写真データ等に関するお問合せ＞

宝塚大学 東京メディア・コンテンツ学部 広報事務局 共同PR株式会社

担当：江頭^{えがしら}、高橋^{たかはし} TEL:03-3571-5228

1.HOT TOPICS—① ～東京メディア・コンテンツ学部で今一番ホットな話題をお伝えします～

卒業制作展

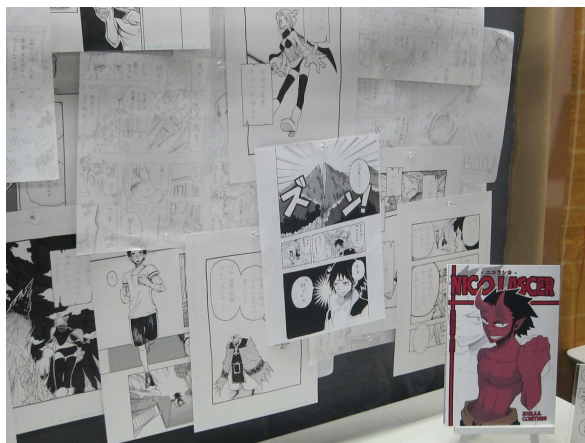
4年生による卒業制作展が、東京新宿キャンパスで行われ（3月10日～11日）、盛況のうちに終了しました。初めて卒業生を送り出すイラストレーションコースにとっては初の卒業制作展ということもあり、卒業生の家族をはじめ、多くの人々が会場を訪れ、熱心に観賞する姿が見られました。

学生たちは、学内キャンパスでの卒業制作展という利点を生かし、機材や教室フロアを自由に活用した展示・上映を行いました。マンガコースでは各自が作品やキャラクターの世界観をブースに表現。ゲームコースでは、iPhone・iPad アプリ、動画などの展示だけでなく、卒業制作作品のプレゼンテーションを学生自らが行うなど、各コースの学生たちが変化に富んだ表現方法で来場者を楽しませました。

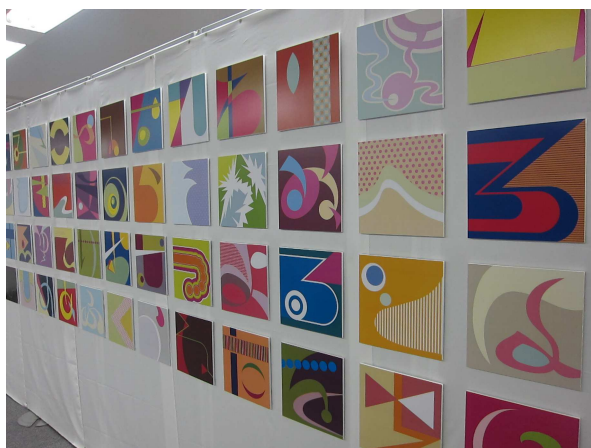
【展示作品から】



「HONE x BOOSTER」
マンガコース4年 清水 詩帆さん



「ニコラシカ」
マンガコース4年 原 正貴さん



「いろはとおん」
イラストレーションコース4年 野川 知子さん

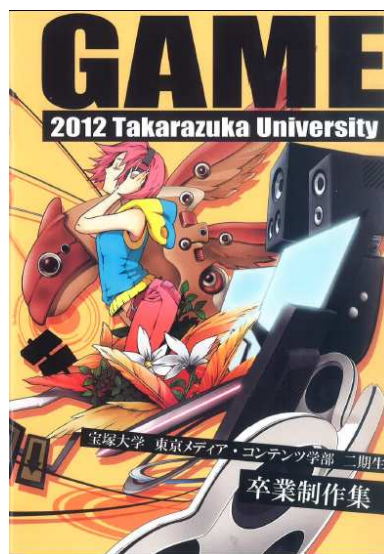


「紙集」
イラストレーションコース4年 虻川 優介さん

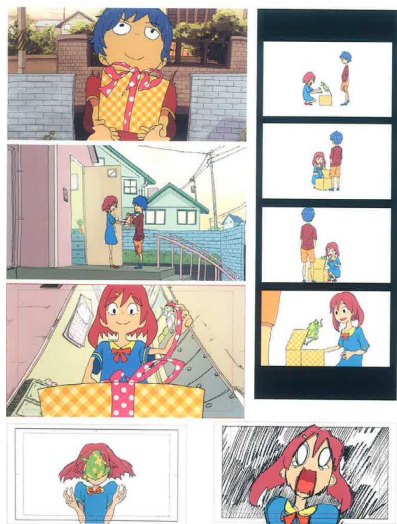
1.HOT TOPICS—①



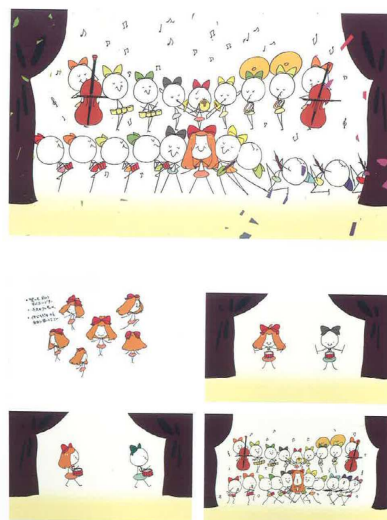
タイトル：「分けて！覚えて！びよびよ三国志」
 ゲームコース4年
 プロデュース：津田 駿平さん
 プログラム：平野 史也 さん
 キャラクターデザイン：鴨田 ゆり江 さん
 背景・UI デザイン：中原 彰哉 さん



ゲームコース卒業制作作品集



タイトル：「カエル塔立」
 アニメーションコース4年
 瀬之口 拓磨 さん、安藤 尚也 さん、伊藤 正樹 さん



タイトル：「The Entertainer」
 アニメーションコース4年
 太田 奈緒 さん、片瀬 央子 さん、濱本 愛果 さん



タイトル：「ケロイド」
 映画コース4年
 監督：鈴木 隼人 さん

1.HOT TOPICS—②

仙台市・気仙沼市でのデジタル掛け軸に 渡邊 准教授がスタッフとして参加

東日本大震災から1年を迎える3月8日(木)～12日(月)の期間、「デジタル掛け軸 DK-LIVE*」の東北巡回『魂の普遍なる形式』が宮城県仙台市と気仙沼市で行われ、渡邊 哲意 准教授がスタッフとして参加しました。

デジタル掛け軸は、デジタルアーティストの長谷川 章氏により考案された独創的なライトアップの手法で、100万枚に及ぶデジタル映像を組み合わせ、歴史的な建造物や雄大な自然などに映写し、幻想的な空間を創り上げるものです。

今回の東北巡回『魂の普遍なる形式』では、初日の3月8日(木)に東二番丁小学校(仙台市青葉区一番町)の外観に映像を投影。10日(土)と11日(日)は、仙台市中心部のマーブルロードおおまち商店街でのイベント「仙台市中心部商店街希望プロジェクト『鎮魂と未来・希望』」の一環として実施。約40台の高輝度プロジェクターを使用した、商店街アーケードの天井への映像投影という世界初の試みは、全長200mにも及ぶ幻想的な空間を作り出し、来場者はその荘厳な風景に見入っていました。翌日の12日(月)には、気仙沼市の気仙沼五十鈴神社に投影し、今回の東北巡回の全工程を終えました。

なお、渡邊 准教授はこれまで、東京都庁、鳥取砂丘「砂の美術館」、二条城のデジタル掛け軸の演出にも関わったほか、中国をフィールドに、映像表現を用いた臨場感のある音楽ライブの演出に関する調査・研究を行っています。



「デジタル掛け軸 DK-LIVE」の様子 (左：東二番丁小学校、右：マーブルロードおおまち商店街)

* デジタル/掛け軸 (D-K)

デジタルアーティストの長谷川 章氏が考案した独創的なライトアップ手法で、100万枚に及ぶデジタル映像をコンピューターにアランダムに組み合わせ、歴史的な建造物や雄大な自然などに映写して、幻想的な空間を創り上げる世界初のアートスタイル。偶然の連続で創り出される映像は、二度と同じものを見ることができない一期一会のアートとも言える。オーロラのようにゆらぎながら変化していく映像は、一人ひとりの受け止め方が異なり、まるで心象風景のような光景は見た人の心を釘付けにする。茶の世界では茶室の何も無い空間に掛け軸を飾ることで世界観が表れる…まさに「色即是空、空即是色」に通じる東洋思想から「デジタルカケジク」の名称が生まれた。

1.HOT TOPICS—③

小林さんが映像部門で特別賞

映画コース 4 年の小林 佑さんが、東日本大震災の発生から 1 年となる節目に行われたイベント「仙台市中心部商店街希望プロジェクト」の、『鎮魂と未来・希望』をテーマとした映像コンペティションで審査員特別賞を受賞しました。

この映像コンペティションでは、「仙台市中心部各商店街プロモーション映像部門」と「東北の鎮魂と未来や希望を表現する映像部門」で作品が募集され、小林さんの映像作品「有り難う」は、最終選考を経て「鎮魂と未来・希望」賞の中の審査員特別賞に選出されました。

小林さんは、3 月 11 日に映像コンペティションの審査結果の発表と表彰式に参加するため仙台に行き、特設会場では他の受賞作品とともに小林さんの作品も公開されました。

受賞作品「有り難う」は、小林さんが東日本大震災後に、避難所などへボランティアとして行った際に撮影していた記録映像を、『鎮魂と未来・希望』をテーマに、新たに編集した作品です。

映画コース 4 年 小林 佑さん

私は昨年 3 月 11 日以降、ボランティアとして数回、岩手に行きました。そして卒業を控えた 2 月に、渡邊 哲意 准教授に今回の映像コンペティションを紹介して頂きました。私はボランティアという形で東北に携わった自分の一つの区切りになるのではないかと思い、映像コンペティションへの参加を決めました。

ボランティアに行き初めて気がついた、東北の方々の優しさや強さ。これらを自分が見た目線でみんなに見て欲しい、知って欲しいと思い、作品を制作しました。



受賞について語る小林さん

■作品概要 タイトル：「有り難う」（3分11秒）

なぜこのタイトルにしたか。「有り難う」という言葉は感謝の言葉なのに、有ることが難しいと書きます。それはなぜかと考えました。そして私は「有ることが難しいこの世の中で有ってくれて、会ってくれて有り難う」と解釈しました。それはボランティアとして行った自分を受け入れてくれた岩手の方々への感謝。そして、つらい状況で今も生き抜こうとしている方々に、ボランティアに行った若造はこう思ったということを知って欲しく、このタイトルにしました。

※作品は、YouTube 等の動画サイトにアップされる予定です。

アニメコースが卒業作品集

アニメーションコースの学生たちが企画・編集した卒業制作作品集が完成しました。

作品集には卒業制作作品の紹介だけでなく、月岡 貞夫 教授、古瀬 登 准教授をはじめ、講師陣が卒業生へのエールとしてコメントを寄せています。また主に3年生と2年生が作品集の編集を行っており、卒業生たちが大学で過ごした4年間の全てが詰まった一冊となりました。

<月岡 貞夫 教授>

先週うれしいメールをもらった。6年ほど前、私のゼミを出た教え子からであった。大手プロダクションを退社し、フリーの演出家になったというものだ。フリーの演出家とはそれなりの実力がなければ務まらないのは当然なのだ。今年宝塚大学から卒業生を出すのは2回目だが、今年は力のある生徒がキラ星のように幾人もいる。おそらく5～6年後には、私にうれしいメールをくれる教え子が何人か出てくるはずである。指導者としてこれに勝るものはない。



アニメーションコース
2011 年度卒業制作作品集

■アニメーションコース卒業制作作品は、「宝塚大学 東京新宿キャンパス YouTube チャンネル」、「学生作品 MUSEUM」(学部ホームページ内、4 月公開予定)でご覧いただけます。

URL <http://www.youtube.com/user/TAKARAZUKAuniv>

■東京国際アニメフェア (3/22～25) で卒業制作作品を公開します。

編集後記 編集長 川上 遥(アニメーションコース 3 年)

冬の寒さも本格的になってきたころ、先生たちがこの本の編集委員を集めていました。3 年生中心とのことでしたが結局 2 人しか集まらず、その後先生の呼びかけで 2 年生が 3 人参加し、5 人でのスタートとなりました。初めてのミーティングは去年のアニメーションコースの卒業制作作品集や他コースの作品集、他校のものなどを見比べながら、ページ数や構成を考えていきました。それから印刷会社や事務局との打合せ、スケジュールなどを急いで決めました。年が明けてからは本に載せるための素材を先輩方や 2、3 年生、先生から集めることに精を出しました。

集まってきた作品を並べて形にしていくと、なんとも言えない感動がそこにはありました。たくさんの方の作品が集まり、それがまた一つの作品になっていく、感動の瞬間です。そこに立ち会えた私はとても幸せです。そして今、完成品を手にしていただいているあなたは、もっともっと幸せに違いありません。

この本に関わってくくださった皆様、先輩方や先生方、協力してくれた 2・3 年生、本を参考にさせてもらったイラストコースの方々、事務局と印刷会社の方々、ご迷惑もたくさんかけましたが、感謝の気持ちの方が何倍も多いです。本当にありがとうございました。

編集委員：林 尚寛 (3 年)、中込 健人 (2 年)、中島 裕太郎 (2 年)、藤倉 拓也 (2 年)

1.HOT TOPICS—⑤

黒郷 ほとり さんが誌上デビュー

マンガコース卒業生の黒郷 ほとり さんの作品『ミス研で逢いましょう』が、「週刊少年サンデーS（スーパー）」4月号（小学館）に新作読切として掲載されました。昨年卒業した黒郷さんは、在学中に小学館「週刊少年サンデー」主催の漫画コンテスト「第1回クラサン杯」でグランプリを受賞、卒業後にはWEBコミックサイト「クラブサンデー」（小学館）に読切作品を発表して作家デビューしました。今回「週刊少年サンデーS」に掲載された本作が、黒郷さんにとって紙媒体では初の誌上デビュー作品となります。

『ミス研で逢いましょう』は、「ミステリー研究会」に意図せず入部してしまった主人公が、謎の先輩美少女に好意を持つところから話が展開していきます。黒郷さんにとって初挑戦となったラブコメ要素と、話の核となるミステリー要素がそれぞれ重なり合った意欲作です。

詳細は「週刊少年サンデーS」4月号をご覧ください。

黒郷ほとりさん

ミステリーもホラーも好きなのですが、怖がりによくトイレやお風呂に入れなくなります。結果、色々とふんわりした感じになりましたが、少しでもお楽しみ頂ければ幸いです。

※ 黒郷さんのインタビューを P.13 に掲載しています。



『ミス研で逢いましょう』 © 小学館 / 黒郷 ほとり

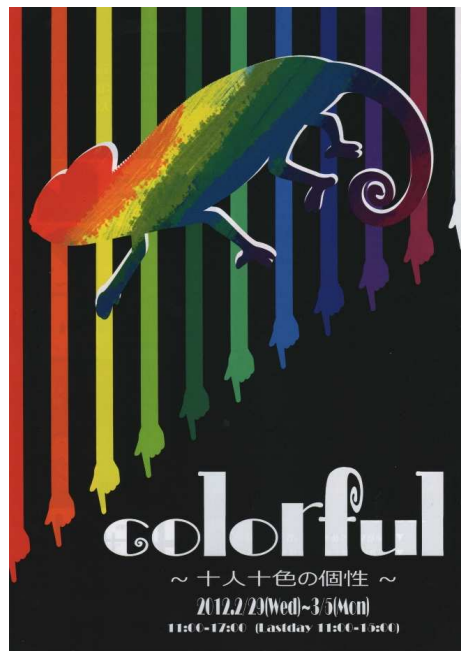
1.HOT TOPICS－⑥

イラストコースの学生がグループ展

イラストレーションコースの学生たちによるグループ展「colorful ～十人十色の個性～」が渋谷区原宿のギャラリー「ガレリア原宿」でこのほど行われました。

今回のグループ展のテーマは「colorful」。画材も違えば作風も違う、個性あふれる10人の“color”を全面に押し出した展覧会です。

今回出品した学生はイラストレーションコースの吉野 美加さん、清水 春花さん、子安 あゆ美さん、鈴木 美星さん、富岡 美穂さん、平野 美紗貴さん、吊（ペンネーム）さん、アニメーションコースの鶴本 結希さんら8人。他大学からも日本大学 芸術学部の小菅 梨都さん、女子美術大学のコバヤシ カオルさんら2人が参加しました。



富岡 美穂さん（イラストレーションコース3年）

今回初めてのグループ展を主催させていただきました。前準備から当日まで、初めてのことばかりで大変なこともありましたが、良い展示会を開催することができました。なにより自分が楽しんでやれたことが一番良かったと思っています。10人の作品は、どれも個性のあふれるものになりました。ご来場くださった皆さん、本当にありがとうございました。



会場には、作家それぞれのカラーが出た作品が展示されました

1.HOT TOPICS—⑦

ギフトショーで卒業生を訪問

台東区お台場の東京ビッグサイトで行なわれた「第73回 東京インターナショナル・ギフト・ショー 春 2012」を学生たちが訪れ、会場に出展していた宝塚造形大学（現 宝塚大学 宝塚キャンパス）卒業生へのOB訪問を実施しました。

毎年春と秋に開催される同ギフト・ショーは、パーソナルギフトと生活雑貨を中心とした日本最大の国際見本市です。市場へ登場する前の製品がそろったイベントとあって、出展企業の営業担当者や製作担当者、ショップのバイヤーらが、出展製品について熱心な情報交換を行う場面が各所で見られました。



水鳥工業の佐藤 文美（さとう あやみ）さん

今回、イラストレーションコースの坂口 茜さんら4人が訪問した佐藤^{あやみ}文美さんは、宝塚造形芸術大学（現 宝塚大学）産業デザイン学科 ビジュアルデザインコースの卒業生です。大学卒業後、神戸市のシューズメーカーで婦人コンフォートシューズのデザイン・企画開発を担当。現在は、静岡市の下駄メーカー・水鳥工業に勤務し、静岡産ひのきの下駄「SHIKIBU（しきぶ）」のデザインを手がけるなど、主に新商品の企画や営業・広報担当として活躍しています。

4人は、佐藤さんのこれまでのキャリア、デザインを生業とする上での心構えのほか、「SHIKIBU」をデザインするにあたってのコンセプトの立て方などをヒアリングし、自分たちの今後の進路設計の参考にしようと熱心に聞き入っていました。



佐藤 文美さんがデザインした
静岡産ひのきの下駄「SHIKIBU（しきぶ）」

【株式会社水鳥工業 会社概要】

創業 1937 年（昭和 12 年）。下駄木地づくりからスタート。サンダル・シューズの中底製造技術も兼ね備え、それらの技術を凝縮し現代のライフスタイルに合った新しい“GETA”を提案し続けている。「げた物語」は 20 年のロングセラー商品。また、多方面で活躍中のアーティストやデザイナーと提携し、下駄だけにとどまらない新しい“はきもの”を生み出している。

ホームページ：<http://www.geta.co.jp>

2.各コース紹介

授業紹介

映像制作演習〔受講学年：ゲームコース 3年（必修課目）担当教員：薄井 隆 講師〕

「映像制作演習」は、これまでに習得した制作の知識を生かし、インターネットやインタラク션을考慮したゲーム、アプリケーションなどのコンテンツ制作を行う授業です。Adobe Flash を用いて、アニメーション・音・映像素材を Action Script 3.0 で制御するための知識と技法を学習します。

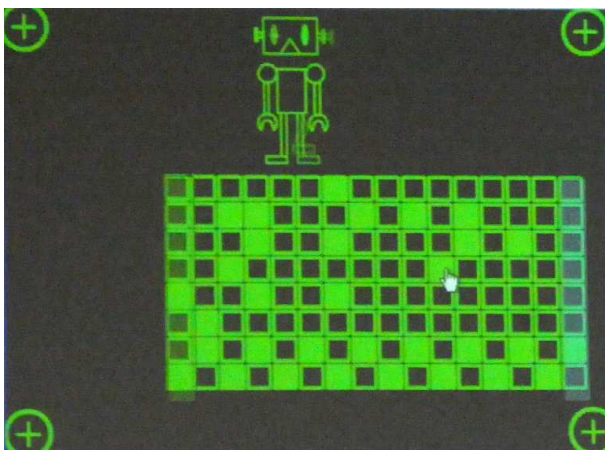
Flash は単なるウェブコンテンツ向けのアニメーションの用途だけではなく、Web ブラウザ上で動作する操作性や表現力に優れたアプリケーション、Adobe Air によるデスクトップアプリケーション、iPhone・Android 向けアプリケーションなど、多岐にわたる表現が可能なツールです。Action Script3.0 を使用した、より高度な制作アプローチを授業を通して習得し、理解を深めていくことを目標に授業を進めてきました。



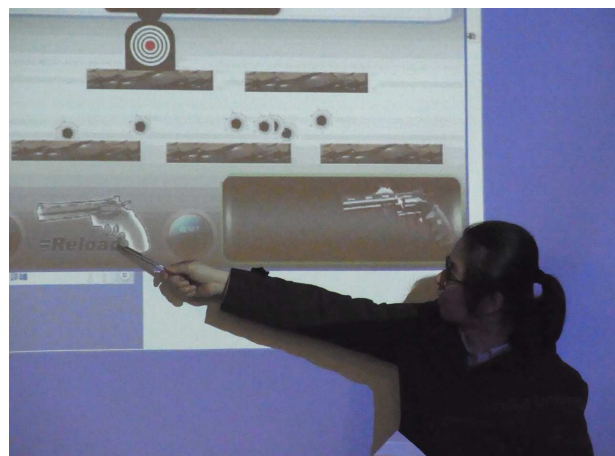
授業を担当する薄井 講師

授業の総決算として、最終回には各自が制作した自分のコンテンツのプレゼン大会を行いました。ある学生は、「ロボットダンス」というアプリを作成。8×16 列のマスとロボットキャラの動作・音を連動させ、クリックしてマスを塗りつぶすと、対応した部分が動き、ロボットがダンスを踊るというアプリを制作しました。滑らかでコミカルなロボットの動きに、学生たちからは驚きの声が上がりました。

薄井講師は授業の最後に、「今の時代は一人で何でもやる時代ではない。自分の強みと弱みを理解した上で、他人と補完し合いながら仕事を進めていくことが重要。だからと言って、自分の弱い部分を伸ばさなくてもよいかというそうではない。コミュニケーションをとる際には、相手がする作業についての知識も持ち合わせておく必要がある。それによってさらにスムーズに、素晴らしいコンテンツを作ることができる」と、これまでの経験談をもとにしたアドバイスを学生たちへ送りました。



クリックするマスにより
ロボットのダンスが変化するコンテンツ



学生の作品にアドバイスする薄井 講師

3.教員紹介

イラストレーションコース 城芽 ハヤト 講師

何かをぶち壊すことができ、何かを創り出せる時代

— PEACE CARD の活動

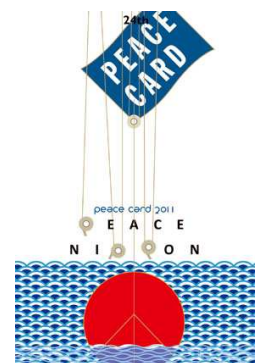
1988年からPEACE CARD（平和の絵はがき）という活動を行っています。絵は究極で考えると「平和のために描いている」のだと思います。PEACE CARDは、若いころ、個展で知り合ったイラストレーターたちと飲んで話をするうちに、「自分たちが描いているのは全部、何かしら平和と関わっていて、今まで面と向かって平和をタイトルとした平和を祈る絵を描いていないのではないか」という話になり、私が言い出しっぺで始めました。

カードは夏の挨拶状のように個人の友人・知人に送っていただくのが基本ですが、PEACE CARDに参加いただく多くの皆さんの絵はがきを一堂に観る機会が欲しいということで、「ピースカード展」を毎年開催しています。

24回目となった昨年は「日本 -PEACE NIPPON-」をテーマにしました。今回、マスメディアとは別の手段で、東日本大震災で被災された方の気持ちを伺うことができればと思い、切手を貼ったカードを2千枚用意して、知り合いや多くの方々にご協力いただき、被災地で配りました。僕も石巻（宮城県）の街頭でカードを配ったのですが、見ず知らずにもかかわらず「ありがとう」と感謝され、とても嬉しかったです。PEACE CARD展は、東京と名古屋と小淵沢（山梨県）の3会場で開催し、会場にお送りいただいたカードを全て展示しました。学生にも、授業で自分たちが思う平和を描いてもらい、展示会に出品してもらいました。学生の中に社会と関わる活動に参加することは、ひょっとすると授業より大事かもしれません。社会と関わる気持ちをもっと多くの学生に持って欲しいですね。



城芽 ハヤト 講師



PEACE CARD

— イラストレーターの仕事とは

イラストレーションは、他者の希望や要求といったものに沿って、その手助けとして絵を描くものだと思います。そういう意味では、自分発信ということにだけこだわっていると、使い物にならないでしょうね。でも、今はいわゆる昔からのイラストレーター風なものあまり要求されなくなって、間にデザイナーやアートディレクターという独立した分野が絡んでいます。そうなってくると、個展しかやっていない人で、自分発信の絵だけを描いていても、デザイナーがこの絵が良いといって使われることもあります。もともとはイラストレーションでなくても、使われ方によっては、普段僕らが描いているイラストレーションよりもはるかに訴求力のある強いイラストレーションになります。

僕は大学が油絵科だったので、最初は自分の絵を描くイメージや認識がありました。そうしたものは、イラストレーターの道を選ぶ際に一度全否定して、自己発信はそんなにたいしたことはないと自分で規制をかけていたので、今ではなかなか元には戻れない状況ですね。ただ最近イラストレーターということにまた強いこだわりが出てきました。個展の絵でも、昔はもっと入れ込んで描いていましたが、最近「これをどうやって使ってもらおうか」に重きを置くようになっています。完成形の絵というより、素材として捉えるような感じが強いです。

3.教員紹介

挿絵の仕事は、一度文章を全部読んでから挿絵を描きます。本の装丁の仕事も行っていますが、挿絵と本の表紙絵は全く違います。一番の違いは説明の度合いでしょうか。挿絵は、本をある程度読みながら、読むと同時に絵を見るもので、例えるならば民謡の尺八のような感じです。半拍遅れ、一拍遅れぐらいでメロディーを追っていく感覚です。本の表紙絵では、本を読んだことのない人に一瞬で訴求しなければならないので、内容をあまり追い過ぎないで、全体のイメージをどう表現するか、付かず離れずの感覚です。どちらかというところ「付かず」の意識のほうが大きいかもしれません。

一 卒業生へ

この春、イラストレーションコースでは初の卒業生を送り出しますが、4年間の過程を見ているのが楽しかったですね。入学当初の学生たちはとても素直で、2年、3年と経つと少し反抗心が出てきて、今はまたそれをこなしてきた上での素直さが感じられます。僕らも初めての教え方で、手探りで授業を進めてきたので、今の4年生にはもっとできただろうなという少し申し訳ない気持ちもあります。ただ、教師も学生も手探りの中で、学生たちが対応してくれてきたことは、これから学生が社会に出る時に必要な自律性を考えると、決してマイナスではなかったという気がしています。

美術は指導するのが難しいジャンルです。僕が正解だと言い張ってもそうじゃないかもしれないし、僕は30年やっている人間で、時に普遍的な正解も交じっていますが、これからの社会に対しては今の学生のほうがはるかに正解を持っている。今の学生を見ていると感性という点ではイーブンだし、プロとして焦りというか危機意識を持っています。

この危機意識は、言い換えるとイラストレーションコースの学生に感じるポテンシャルです。長い期間、イラストレーションの世界はハイセンスで洒落なタッチの「今」を感じさせるイラストレーションの流れが主流となっています。そういったものへのアンチテーゼのように、ファンタジーに軸足を置きつつ愚直で労力を惜しまないタッチが、本学の学生にひとつの共通項のように形成されつつあると思っています。これは、北見教授（イラストレーションコース）のパーソナルな持ち味に起因する部分が大いだと思いますが、学生だけではなく、講師陣も北見さんに共感を覚える者が集まっています。将来、世間がこれを「宝塚調」と認識するとき、次代への大きな流れを発信できるのではと思います。そのためなら、ぼく自身のタッチをそれにすり寄らせてもいいと思っています。

今の時代状況は、真っ暗と言ってもいいくらい真っ暗で、そしてチャンスの塊。何かをぶち壊すことができ、何かを創り上げることができる時代にいると思います。一億総中流と言われてきた日本で、何かをぶち壊すことができる破壊力のある時代は、僕は経験したことがありません。若い人たちの感性と言うと大雑把ですが、若者は大人の嘘はちゃんと見抜いていて、沸々とした熱い想いを持っています。そうした想いが作品に向くのか、世の中を直す方向に向くのか、どちらかわかりませんが、潜在的なパワーというのはこの時代では持たざるを得ません。良い時代に良いモノはできないと思います。

<城芽 ハヤト 講師 プロフィール>

1955年、秋田県横手市生まれ。武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒。在学中より仕事を始め、卒業後、フリーランスのイラストレーターに。80、90年代には、30本あまりの映画・ドラマに美術協力に参加。現在は書籍カバー・小説誌などの雑誌挿画・絵本などを主なフィールドとし、人物などをモチーフに展開中。

1979年、初代ナイスガイ武蔵美。2011年、第42回『講談社出版文化賞』『さしえ賞』受賞。

ホームページ：<http://www.peacecard.com/jome.html>

<http://www.gallery-h-maya.com/artists/jomehayato/> (ギャラリーハウス MAYA)

4.卒業生紹介

黒郷 ほとり さん (マンガコース 卒業)

少年漫画を描くことの難しさ

絵を描くことは高校時代からずっと好きでしたが、マンガ家としてデビューを果たすとは、当時の私には全く想像できないですね。私は漫画の基礎を大学に入ってから学んだのですが、在学中に小学館「週刊少年サンデー」主催の漫画コンテスト「第1回クラサン杯」でグランプリを受賞したことをきっかけにマンガ家を目指すことを決意しました。卒業後、少年サンデーの新作WEBコミックサイト「クラブサンデー」や、最近では「週刊少年サンデーS (スーパー)」に読切作品を掲載していただくなど、自分の予想以上に作品を描かせてもらっています。

現在は『名探偵コナン』の青山 剛昌先生の職場でアシスタントとして週2日ほど働いており、その他の時間で自作の漫画制作に取り組んでいます。アシスタントは私を含めて6人いて、皆さんとても優しく接してくれるので職場の雰囲気はとても良いです。原稿は最終的に商品となるものなので、高いクオリティーが求められます。作業は下書き、ペン入れ、仕上げとありますが、下書きとペン入れで1日6枚ぐらい描いています。まだ描くスピードが遅いので苦勞する点もありますが、好きな仕事なので辛いとは思いません。

「週刊少年サンデーS」で発表した新作『ミス研で逢いましょう』は、ラブコメディとミステリー要素が入った話です。雑誌のカラーとして、少年サンデーではラブコメ要素が求められるのですが、今まで恋愛がメインとなる話を描いたことがなかったので、とても苦勞しました。具体的には、ヒロインを必ず登場させ、ヒロインに対する主人公の心情を多く入れること、手をつなぐなど、物理的に目で見える主人公とヒロインの触れ合いを描くことが求められ、担当の編集者と話し合い何度も直しました。少年漫画では少女漫画よりもキャラクターが先行する部分が強いのですが、私はこれまでにどちらかというと少女漫画寄りの作品を描いてきたので、少年漫画の作風に慣れることがこれからの課題です。

次回作はまだ検討中ですが、ファンタジー系の作品を考えています。担当の方から「連載を視野に入れて作って欲しい」と言われているので、全体の世界観を決めて第1話目の構成を練っています。今は目の前の仕事に集中する段階ですが、生活できなければ仕事として成立しないと私は思っています。マンガ家として自立して生活できるようになることを目標に、先へと進んでいきたいと思っています。



誌上デビュー作品について語る
黒郷さん

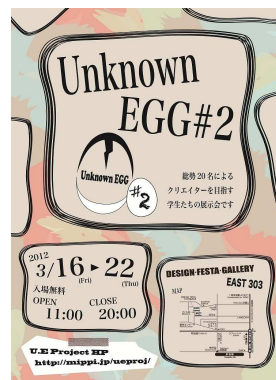
<黒郷 ほとり さん プロフィール>

桜蔭高等学校（東京都文京区）出身、マンガ家。2010年、本学在学中に小学館「週刊少年サンデー」主催の漫画コンテスト「第1回クラサン杯」に『セイレーンのまどろみ』を出品し、グランプリを受賞。卒業後、2011年夏に「クラブサンデー」(WEB)に読切『男でしょう?』を発表し作家デビュー。2012年2月に「週刊少年サンデーS (スーパー)」に読切『ミス研で逢いましょう』を発表し誌上デビュー。現在、『名探偵コナン』青山 剛昌先生の職場でアシスタントとして働きながら自作の漫画を執筆。

5.今後の予定

■ 「Unknown EGG #2」

期 間：3月16日（金）～3月22日（木）
会 場：DESIGN FESTA GALLERY EAST 303（東京都渋谷区神宮前）
内 容：ゲームコースの河田 佳美さんらが主催するグループ展。本学の他、日本大学や東京工芸大学、武蔵野美術大学、デジタルハリウッド大学、東京工科大学のクリエイターを目指す学生総勢20名による展示会です。



■ 東京国際アニメフェア「宝塚大学 東京メディア・コンテンツ学部ブース」の開催

期 間：3月22日（木）～25日（日） ※22・23日はビジネスデー
会 場：東京ビッグサイト（東京都江東区有明）
内 容：アニメ業界世界最大級のイベント「東京国際アニメフェア」にブースを出展します。卒業制作作品や、2・3年生制作作品「歌のアニメーション」の上映と、個人制作作品、イメージボードや原画、背景などの素材を展示紹介いたします。

■ 竹内 一郎 教授 作・演出の舞台

「劇団俳小公演 なにもいらない — 山頭火と放哉」

期 間：2012年3月21日（水）～25日（日）
会 場：シアターグリーン・ビッグツリー（東京都豊島区南池袋）
内 容：大正時代から昭和初期、種田 山頭火と尾崎 放哉という二人の偉大な俳人によって大いに花開いた自由律俳句。制約がない句形だからこそ、俳人たちの技量、センス、感受性が問われる中で、自らの人生をすべて賭けることをしてでも、美しい言葉や最も相応しい律を研鑽しなくてはならない。美しい日本語とはどういうものか、さらに、人間の真の自由な生き方とはどういうものかを問いかける、渾身の新作書下ろしによる舞台です。



■ 宝塚大学 東京メディア・コンテンツ学部「オープンキャンパス」

日 時：2012年3月25日（日） 13：00～16：30
内 容：大学紹介、入試説明、模擬授業、個別相談、キャンパスツアーなど

■ 「第5回歌舞伎町農山村ふれあい市場」で似顔絵描き・ライブペインティングなどを実施

日 時：3月25日（日） 11時～17時
会 場：新宿区立大久保公園 イベント広場（東京都新宿区歌舞伎町）
内 容：「歌舞伎町農山村ふれあい市場」は、日本各地の新鮮な野菜・くだもの、名産品、特産品の販売の他、ジャズ演奏、大道芸などのパフォーマンスが行われるイベントです。前回に引き続き、今回も似顔絵描きで参加するほか、ライブペインティングの実施やイベント運営のお手伝いもします。